この地域の恙虫の調査を行つたのでその成績を報告する。調査が行われた所は美保関、安来、広瀬、玉造、横田、八川、馬木、三乃屋、温泉津、浜田、益田、日原の計 12 カ所である。これらの地で *Rattus norvegicus* 5, *Apodemus speciosus* 50, *A. geisha* 8, *Urotrichus talpoides* 3 計 66 頭の小哺乳動物と *Coturnix coturnix japonica* (ウヅラ) 1 羽を捕獲した。これらの宿主について恙虫を検べた結果, *Trombicula pallida* 5, *T. palpalis* 93, *T. fuji* 1079, *T. kitasatoi* 114, *T. miyajimai* 5, *T. kuroshio* 2, *T. murotoensis* 1, *T. daisen* 3, *T. japonica* 1, *T. kochiensis* 66, *Euschöngastia ikacensis* 6, *Gahrlepiea saduski* 157 計 1532 匹の恙虫幼虫を得た。そして、これらの恙虫について分布地、採集時期及び宿主との関係等を明らかにした。*T. pallida* は少数乍ら馬木及び三乃屋の 2 カ所から見出されているが、本種は広義の恙虫病の媒介者と推定せられているので、これらの地では本病との疫学的関係において注意を要する。また、調査地の内の 6 カ所において捕獲した野鼠からリケッチアの分離を試み、仁多郡横田及び鹿足郡日原の 2 カ所において恙虫病リケッチアの分離に成功した。上記、恙虫病リケッチアの媒介者と目される恙虫と、病源保有の野鼠が棲息していることから、この地域に散発している原因不明の発疹性熱性疾患は軽症の恙虫病ではないかと疑われる。そこでその病因を追究中であるが未だ結論を得ていない。(鳥取大・公衆衛生)

宮崎県の恙虫：笹原徹・岩倉利明 Sasahara, T. & Iwakura, T. : On the trombiculid mites in Miyazaki Prefecture

昭和 29 年 5 月より昭和 33 年 4 月に至る間、県下の恙虫とリケッチア保有鼠の調査を行つた。調査は宮崎市周辺を重点に、県北部の北川村、延岡市、日向市及び都農町と、県西部の小林市周辺及び都城市附近、並びに県南部の日南市、串間市に於て捕鼠を行つた。野鼠よりの恙虫病群リケッチア分離については、北川村、日向市、高原町及び宮崎市周辺地区 9 カ所の合計 12 カ所で 36 株分離し得た。捕獲した宿主はアカ鼠 311, ドブ鼠 211, クマ鼠 18, ヒメ鼠 6, ハタ鼠 3, スミス鼠 2, ヒミズモグラ 32 及びモグラ 2 の計 585 匹であり、之等に附着していた恙虫は 5 属 19 種で、多いものから順にあげると、*T. kitasatoi* 3,403, *T. fuji* 2,769, *T. murotoensis* 2,649, *T. kochiensis* 2,007, *G. saduski* 1,261, *T. kuroshio* 1,008, *T. scutellaris* 950, *T. tamiyai* 950, *T. kansai* 383, *T. miyajimai* 313, *T. mitamurai* 180,

D. okabei 113, *T. japonica* 66, *E. ikacensis* 45, *T. daisen* 13, *S. tarsalis* 13, *T. miyairii* 7, *G. ogatai* 4, *T. ichikawai* 3 の計 16,135 匹に及び、之等の採集成績は 11 月より 3 月迄が最も多く、初夏より初秋にかけての成績は最も少なかった。又山林に最も多く、次で田畑、部落の順である。捕獲数の多かったアカ鼠については、*T. tamiyai*, *T. daisen*, *T. miyairii* を除いた 5 属 16 種、計 13,175 匹を採集し得た。興味ある知見は青島のドブ鼠に於て、*T. tamiyai* のみ 12 月と 1 月に多数附着していたことと、小林市近郊エビノ高原のヒメ鼠に、県下で初めての *T. daisen* を得たことである。又 *T. scutellaris* については、宮崎市周辺と都城市附近の一小地域に見出されたが、その内宮崎市宮崎神宮境内樹林に於ては、10 月下旬より出現し、12 月には最高を示し、4 月上旬迄発生することを知り得た。尚、県内に於ける未調査の山岳地帯の恙虫分布については今後更に調査をすすめる予定である。(宮崎県衛研)

日本産恙虫の分布に関する 2, 3 の新知見及び宿主嗜好性について：田宮猛雄・加納六郎・熊田信夫・金子清俊・久郷準・浅沼靖 Tamiya, T., Kano, R., Kumada, N., Kaneko, K., Kugoh, T. & Asanuma, K. : Some new knowledges on the geographical distribution and host-preference of Japanese trombiculid mites

1954 年 11 月以降、我が国に於ける恙虫病群リケッチア症の研究が、各機関の協力によつて実施されて来たが、本報に於ては此の研究の開始以来 3 年 2 カ月間、(1957 年末迄)の記録を整理して、その概要を報告する。

調査地域は北海道稚内市より九州南端に亘る各地及び周辺の諸島であつて、調査地点は 581 地点に及び、此の中 127 地点で捕獲された野鼠より恙虫病リケッチアの陽性分離成績が得られている。(此の詳細に関しては、本研究班の病原体及び疫学担当班によつて、別途報告の予定である) 恙虫病媒介動物の調査として得られた資料は、恙虫幼虫：3 亜科 7 属 51 種、総数 165,526 疋、宿主動物：6 科 14 属 18 種、計 4,452 頭の哺乳類と、28 属 32 種、計 173 羽の鳥類、総数 4,625 個体である。恙虫の分布に関する成績の中、今回新たに報告すべきものは *Euschöngastia koreaensis* の本邦新記録であつて、1957 年 4 月 25, 28 の両日に長崎県(対馬)と対馬町及び同県厳原町産のツシマアカネズミ各 1 頭より、夫々本種幼虫が 1 疋宛採集されている。又疫学的に見た重要種と考えられている *akamushi*, *tosa*, *scutellaris*, *pallida*, *palpalis* 等の分布について、従来の記録を参照しつつ考察を加え

た。

一方、恙虫幼虫の宿主嗜好性及びその寄生率について検討を加え、以下の如き結果を報告した。(概要のみ)

ネズミ属 5 属 6 種—(4 属 36 種)*, キヌゲネズミ科 3 属 4 種—(3 属 26 種), 食虫目 4 属 5 種—(4 属 27 種), 鳥綱 28 属 32 種—(3 属 10 種), その他ヤマネ, タヌキ, イタチ等—(2 属 3 種). * 括弧内は寄生恙虫を示す
(東大, 東医歯大, 資源研)

日本産ケモノハジラミ数種: 中川宏 Nakagawa, H. : Mallophaga from Japanese mammals

従来、日本から知られるケモノハジラミは家畜、実験動物(モルモット), 輸入動物(ゾウなど)に寄生するのが若干あるのみで、日本固有の野生獣からはハジラミの記録はない。演者はニホンザル, ツキノワグマ, アナグマ, キツネ, オコジョウ, ニホンジカ, イノシシ, ウサギ, ムササビ, モモンガ, リス, シマリスの 11 属 11 種のケモノについて、ハジラミの寄生状態の調査を行った所、ツキノワグマ, アナグマ, オコジョウ, ニホンジカ, ノウサギの 5 寄主より 3 属 5 種のケモノハジラミをえた。このうち 2 種は未記載種と思われノウサギ寄生をのぞく 4 種について報告する。

(1) *Damalinia (Damalinia) nippon* sp. nov.

シカ科には *Damalinia* と *Bovicola* の 2 亜種が寄生するが、今回えた材料は *D. forficula* 及び *D. meyeri* 特に前者に近縁のもので、多くの点で似るが、生殖器の形状から区別できる。基本寄主, *Cervus nippon centralis* ホンシュウジカ

(2) *Trichodectes (Ursodectes) pinguis thibetanus* ssp. nov.

原種 *pinguis* はアカグマ *Ursus arctos* 寄生の雌より記載され、その後雄の記載も行なわれている。又、Newmann, Nitzsch はツキノワグマ寄生のハジラミを *pinguis* としたが、最近 Hopkins は北米産のクマより *pinguis* の新亜種を記載したさい、ツキノワグマ寄生のハジラミは真の *pinguis* ではないのではなかろうかとのべている。演者は大英博物館よりおくられた標本と比較した結果、ツキノワグマ寄生のハジラミを新亜種として報告する。

基本寄主, *Ursus thibetanus* ツキノワグマ

(3) *Trichodectes (Trichodectes) melsi* (Fabricius), 1805, 基本寄主, *Meles meles* アナグマ

(4) *Trichodectes (Stachiella) erminae* (Hopkins), 1941, 基本寄主, *Mustela erminae* オコジョウ(資源研)

**京都市修学院地区の流水域におけるリンデン乳剤による
ブユ幼虫の駆除について: 正垣幸男・吉田幸雄・小野禎
治・中尾万之助 Shogaki, Y., Yoshida, Y., Ono, T.
& Nakao, M. : On the control of blackfly larvae
with lindane emulsions in the natural streams in
Shugakuin district of Kyoto city**

正垣, 吉田は昭和 31 年 (1956) 以来、リンデン乳剤による京都市八瀬地区、高野川流域のブユ幼虫駆除実験を実施し、かなりの効果をあげて来たが、昭和 32 年度は更に同流域下流の修学院地区における駆除を実施した。前に報告したように高野川流域において人畜を刺咬するブユはニッポンヤマブユであるが本地区においても優占種はニッポンヤマブユであつて、現地市民だけでなく、外人の観覧者をもふくめて年間 20 万余の観光客を迎える修学院離宮を中心とする本地区のブユによる被害は又顕著である。その方法は駆除対象動物は流水域のブユ幼虫で、実施期間は 2~6 月間は月 1 回、7~9 月間は月 2 回、10~11 月間は月 1 回の薬剤投入であり、使用薬剤はリンデン乳剤 (ユーコー乳剤 B) を用い、薬剤濃度は本流においては 1 分間の流水量の 1 ppm, 支流, 分流においては 1.5 ppm の濃度であり、駆除流水域は高野川本流においては 1 箇所、支流, 分流は 65 箇所、使用薬剤全量は 36,468 cc 即ち 9.63 ガロンであり、従事延人員は 218 人/日であつた。幼虫の最も多く繁殖している 15 箇所を選び、リンデン乳剤投入前、投入後の幼虫の 10 分間採集を実施した結果では幼虫流失率は 94.7 % で残留率が 5.3 % であつた。更に従来ブユの被害の最も多かつたと言われる離宮の隣接の赤山院にて毎月 1 回日出前より日没後まで実施した biting collection の結果では 5 月—6 匹, 6 月—17 匹, 7 月—16 匹, 8 月—28 匹, 9 月—0 匹, 10 月—6 匹で、6 カ月間の合計 73 匹の雌成虫を得たが全部がニッポンヤマブユであつて、現地市民の言よりすれば駆除実施前の 90 % 以上の減少であるものと思われる。以上の結果よりリンデン乳剤を用い、1 分間の流水量の 1.0~1.5 ppm の濃度にて流水域 800 米間のブユ幼虫を 90 % 以上流失させることが出来成虫の減少も好成績をあげ得ると言えよう。本地区における魚類への影響は高野川本流の投入時に若干魚が稍々狂奔に近い状態になつたがしばらくにして恢復し、直接の被害を与えたことは 1 度もなかつた。本実験には猶幾多の検討すべき問題を残しているが、今までの実験で最も困難を感じたことは 1 分間の流水量を正確に測定し、算定することのむづかしさである。即ちブユ幼虫の棲息している溪流、水溝等の早瀬、平瀬の流水域の状況が極めて不規則で従来とられた川幅×水深×流速では正確を